

798-102



1200501607488

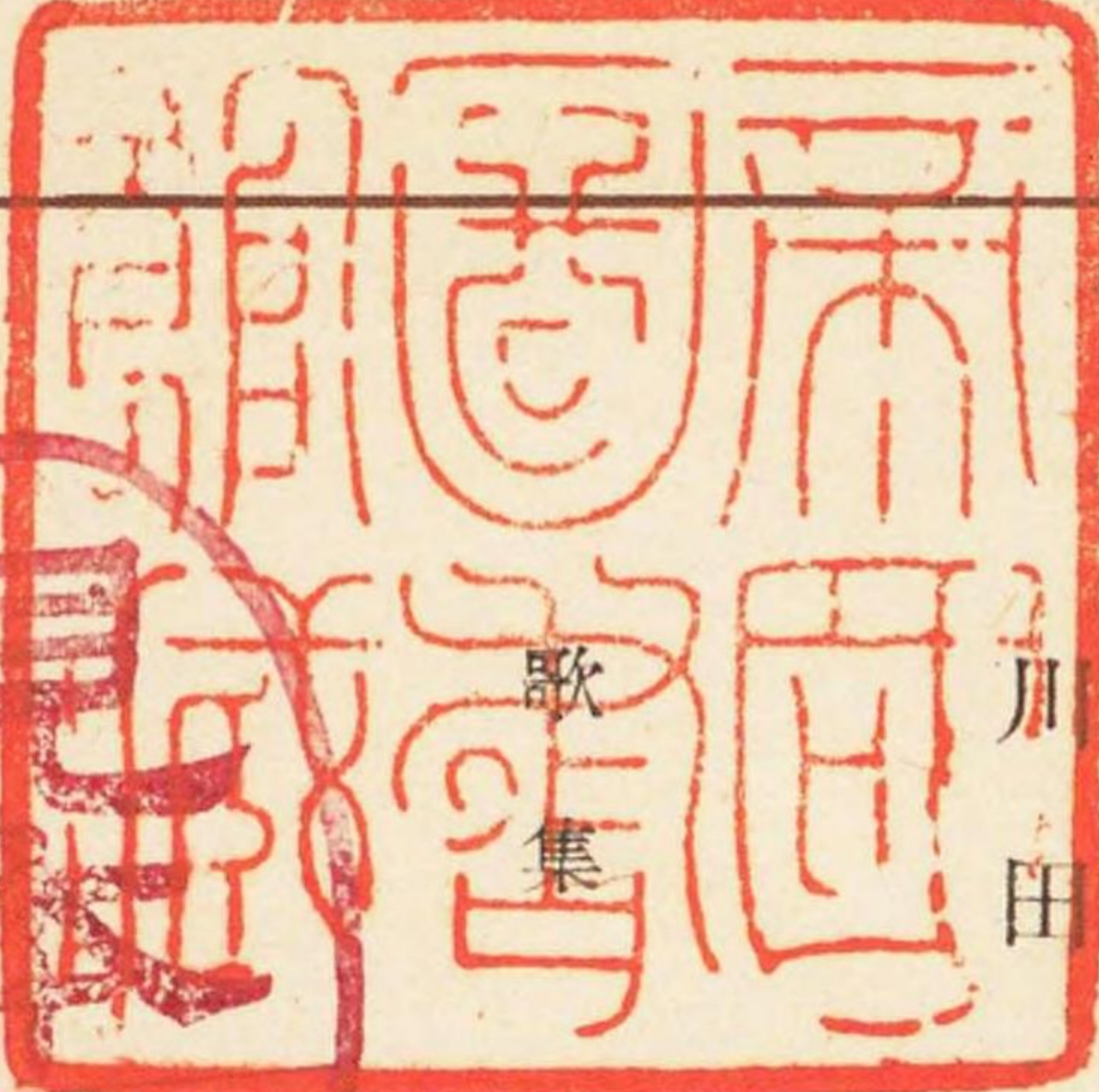
鷺



順田川



575



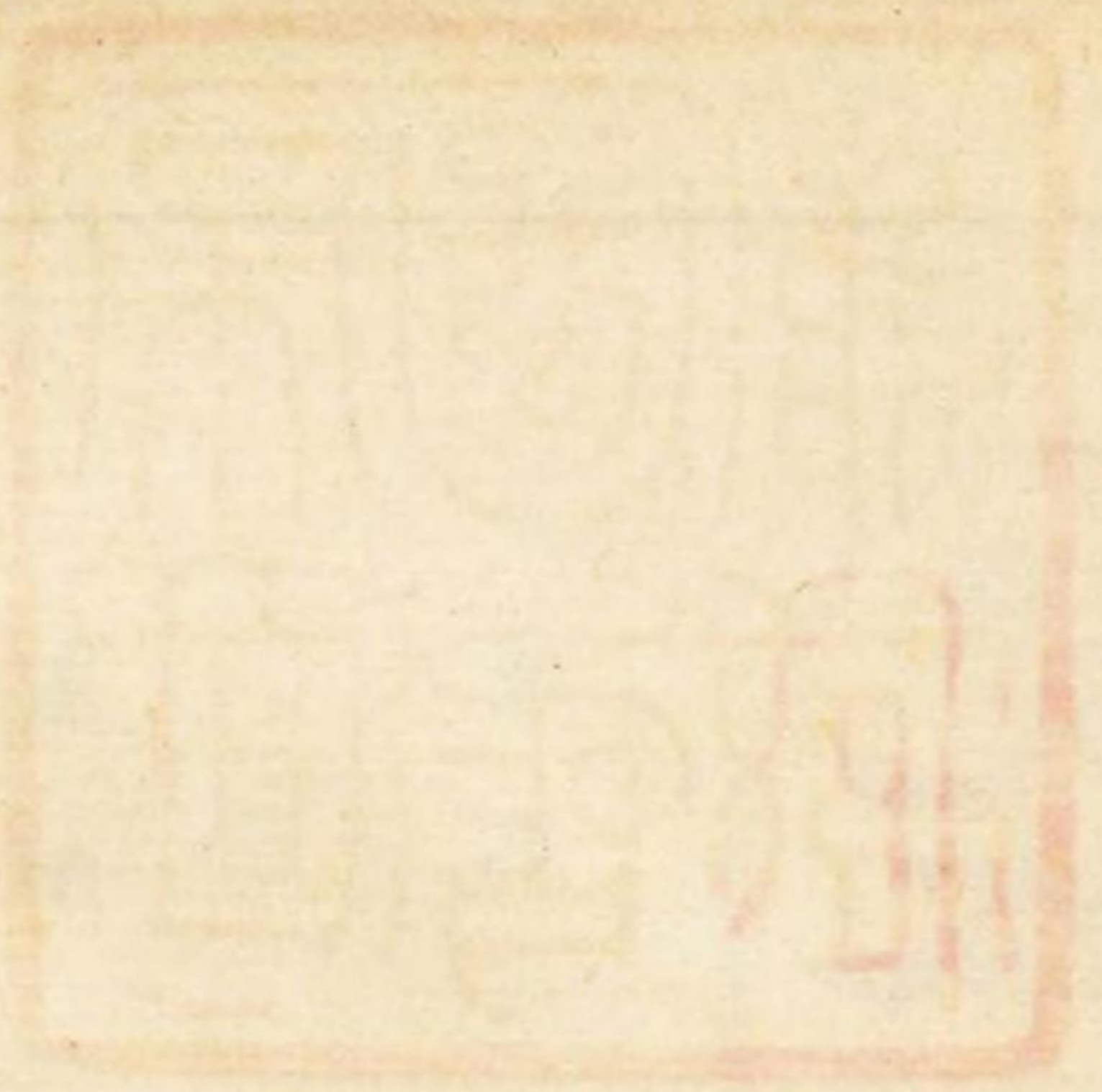
加田
順著
歌集
鷺

創
元
社



歌集

この歌集を亡妻和子に捧ぐ



鷺

798
102

目次

昭和十一年

辭職の後(三首).....	三
彌陀高原立山行一(六首).....	四
立山頂上立山行二(二四首).....	七
黒部へ立山行三(二七首).....	三

鷺	立山行四 (一〇首)	二
湯川	谷立山行五 (七首)	二五
皇太子殿下	(一首)	二七
澁谷の家	(五首)	二八
天	津北支行一 (四首)	三〇
北	平北支行二 (一六首)	三三
萬壽山離宮	北支行三 (六首)	三九
明十三陵	北支行四 (六首)	四一
萬里長城	北支行五 (一〇首)	四三
福島酒田間	兩羽行一 (七首)	四七

鳥海	山兩羽行二 (九首)	五〇
酒田秋田間	兩羽行三 (七首)	五四
八郎	瀧兩羽行四 (九首)	五七
田澤	湖兩羽行五 (一〇首)	六一
瀨見	溫泉兩羽行六 (五首)	六六
薩摩	歌南九州行一 (一五首)	六八
大浪	池南九州行二 (六首)	七五
鶉	戶南九州行三 (四首)	七八
鴨	南九州行四 (六首)	八〇

昭和十二年

東北と北海道 (二三首)	二七
炎夏 動員 (一二首)	九
炎夏 朝夕 (九首)	一〇三
井伊谷 詣 (八首)	一〇六
銃後私帖 一 (二一首)	一一〇

昭和十三年

銃後私帖 二 (四首)	一一九
-------------	-----

長期戦 覺悟 (八首)	三二
銃後私帖 三 (八首)	三四
西湖 雨後 (八首)	三七
武漢 進撃 (七首)	三二
北白川の家 (四首)	三四
那須岳と朝日嶽 (四四首)	三六
鹽原山 晚秋 (二七首)	一五四
名護屋城 陟 (北九州行一) (九首)	一六二
呼子 港 (北九州行二) (四首)	一六五
領巾 振山 (北九州行三) (六首)	一六七

元寇防壘趾	北九州行四	(八首)	一六九
宮崎宮	北九州行五	(六首)	一七二
觀世音寺	北九州行六	(九首)	一七四
都會の冬	(二三首)		一七八

昭和十四年

伊勢參宮	(四首)	一八九
冬の大阪城	(一四首)	一九〇
大坂陣斷片	(七首)	一九五
長久手村	(一四首)	一九九

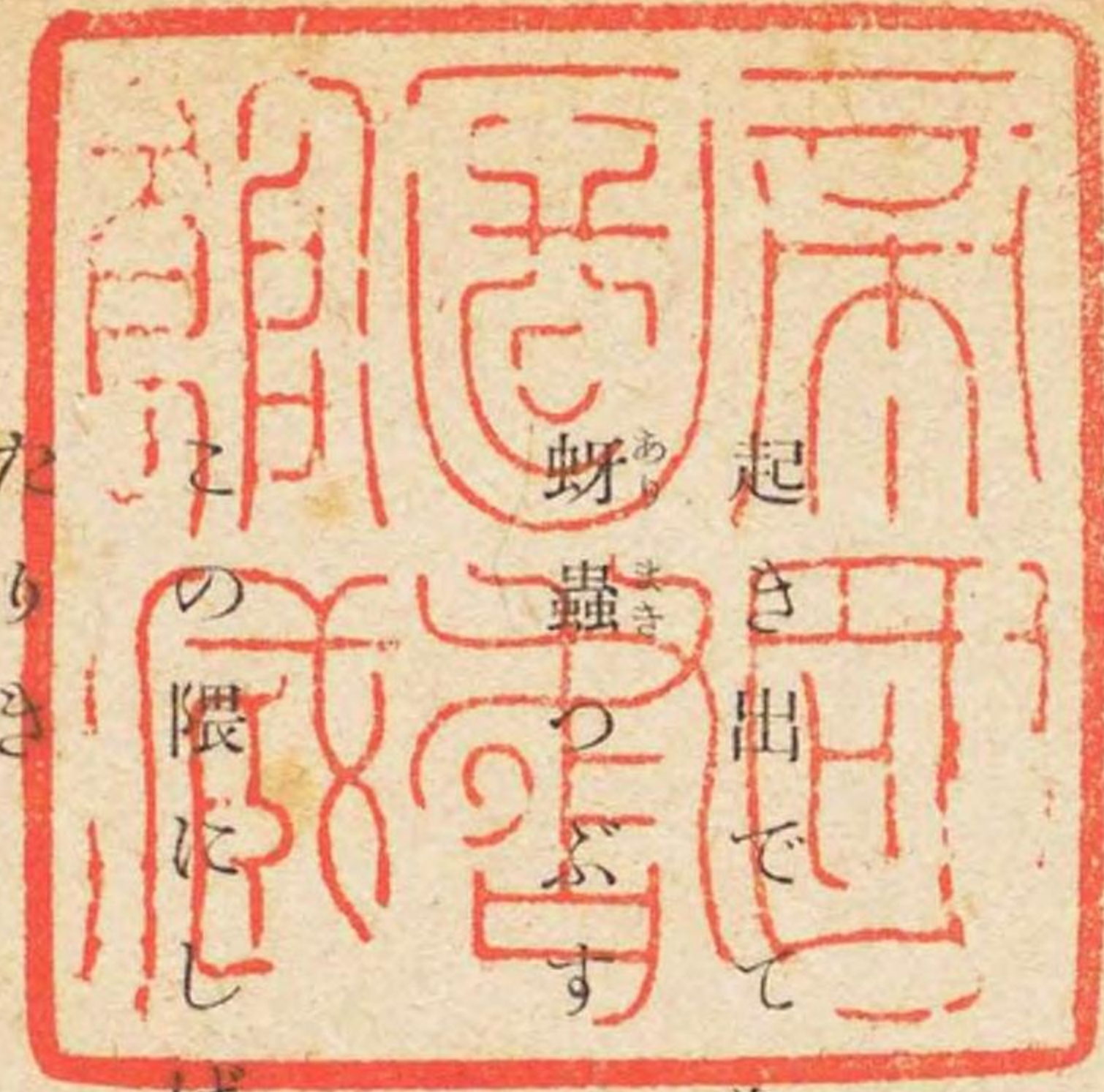
賀名生初夏	(一九首)	二〇四
長篠古戰場	(五首)	二二三
伊那大河原城趾	(六首)	二二五
鹿兒島市	肇國聖蹟巡拜歌一	(二〇首) 二二七
笠狹之碕	肇國聖蹟巡拜歌二	(二〇首) 二三一
南薩諸港	肇國聖蹟巡拜歌三	(二二首) 二二九
鹿兒島神宮	肇國聖蹟巡拜歌四	(二〇首) 二三四
霧島山	肇國聖蹟巡拜歌五	(三一首) 二三九
鵜戸神宮	肇國聖蹟巡拜歌六	(八首) 二五一
西都原古墳群	肇國聖蹟巡拜歌七	(八首) 二五四

宮崎神宮肇國聖蹟巡拜歌八 (五首)	二五七
美々津懷古肇國聖蹟巡拜歌九 (七首)	二五九

○
卷末小記

昭和十一年

辭職の後



起さ出でて
ありたつ庭の夏淺し
櫳の木にゐる

蚘あ蟲まのふす

この限にし
ける若竹萩若葉
我家わがの庭を忘れぬ

たりさ

この蛇の我家の庭の草むらに殻を脱ぐ日は遠
からなくに

彌陀高原 立山行一

七月下旬越中立山に登るとて

朝間にて郭公鳥の聲多したかやまはらの梅の
木群に

高野原の郭公鳥はをちこちに聲多くして幽か
なるかな

薬師岳は朝陽のさせる山腹に雪の斑點の大き
く粗き

✓ 追分の小屋のまはりに生ひひろざる山笹叢に
朝日が強し

劍岳深碧空に衝き峙ちてあな荒々し岩に瘦せ
たり

室堂に泊る

しくしくと腹の痛めば山岳小屋に兔の膽を嘗
めて寝にけり

立山頂上 立山行二

立山主峯登攀

立山は荒き岩山岩の秀ほに石積みあげて祠ほくら据すゑたり

立山の雄山にたてる古祠あふぎ見ればそれも
巖いはほの如し

手力雄の神に仕ふる山禰宜の祝のりこ詞を聴くも石
に坐すわりて

立山の雄山の谷は寒々し大きく剝むれて古雪残
す

高やまのいただきにして眞夏日は上うは汚よれせる
堅雪かたゆき照らす

午後

あからひく日の眞晝なれ雄山より大汝山へ岩
尾根つたふ

山の上のしじまは深くおきろなし眼の前の岩
に陽炎立つも

晩景

▼現身うつそみの眼はもとどかぬ谷底よりここにきこゆ
る黒部川の音か

✓立山うしろたてが後立山やまに影うつす夕日の時の大きしづ
かさ

社務所に泊る、深夜烈風を聞く

外に出で星空にくろき山々の秀ほ一目見しかば
戸を締めてはひる

海拔一萬尺の山の上なればこの風は夜々吹く
ものか考へて居り

社務所もろとも吹き飛ばされてぬばたまの黒
部の谷にあとかたもあらじ

強力衆がうりきしゆう深く躰いびけり弱蟲のわれを叱りて寝むと
ぞ吾がする

山の秀ほの岩むらに棲む岳雀たけすずめ鋭聲とこを啼きて天明
けむとす

✓ 朝明にて吾が脚かろしいちめんはくさんいちげに白山一華咲
く谷間なり

御山谷より中の谷に出でむとしていたや峠といふ
を越ゆ、道に迷ひて困苦すること約三時間

強力がうりきの佐伯八郎十年前じごせに通とりし道をあちこち
探す

山刀なふりて矮樹わいじゆきり拂はふうしろよりひたに吾
が行く木のくれ闇を

、蘚苔こけの上に羚羊かもしかが著けし足の痕あとのかそけきも
のを見つつ失ふ

二方ふたかたにわかれて道を探すわれら木のくれ闇に
聲呼こゑびかはす

常滑の岩にすがりて起きあがり挫けしと思ふ足ちからなく

今にして雨の襲ひ來ば人は不知おそらくわれは凍え死ぬべし

中の谷に出では出づともその真下斷崖ならば如何にかもする

中の谷に斷崖は無し強力の佐伯八郎はつきりと言ふ

強力の佐伯八郎に信頼しどうにかなるべしと黙りて歩む

黒部の峽谷に行かむと言ひしはわれなりき然思ひつつ黙りて歩む

辛うじて中の谷に出づ

いのち拾ひしたと喜ぶ弱蟲は同行どうぎやうのなかにわ
れのみならむ

高やまゆ下りおりて吾が來し谷ふかくちさき山椒
魚泳ぐ水あり

平の小屋に泊る

ゐろりべにわれら坐りすわりて夜深し黒部川の大き
なる岩魚いはなを炙あぶる

ゐろりべに寝ても寒しも涼々そうと黒部川のおと
小屋に響かふ

翌朝刈安峠を登る

猿麻^{さるま}棒^{ぼう}さがる老木の梅^{うめ}の木をむかうの岸に見
てを静けし

朝登る峠のみちに岩梨をとりては嚙みぬその
澁き實を

鷺

立山行四

五色の小屋附近にて

沙羅^{さら}峠^{たうげ}眼^{まなこ}にあらはなれうつそみの人ひとり行
かぬ道灼^やけて居り

みすず刈る信濃路さして一百騎佐々成政の越
えし峠か

目交まかひの岩山の間まゆうちつけに大きなる鳥の飛
び出でにけり

立山に棲むとは聞きし大鷲の目交にして飛び
たつを見き

案内者案内の佐伯八郎言へらくはかかる大鷲を初
めてぞ見し

見上ぐらく山原のそらを飛ぶ鷲の大き翼の白
斑ふかがよふ

山空やまぞらをひとすぢに行く大鷲の翼の張りの澄み
も澄みたる

立山の外山が空の蒼深み一つの鷺の飛びて久しき

向つ峰の偃松叢へ大鷺の下りたる迅さ眼にもたまらず

大鷺の下りかくろひしむかつやま龍王岳は彌高く見ゆ

湯川谷 立山行五

岩より岩に架けし柴橋わが友の渡るを見ればしなひ居るなり

紅き實の毒空木多し磧よりのぼる熱氣を耐へて歩む

この瀬に立つ大岩さへに年々に押し流されて
在り所や變る

汗流して岩のなかより上り來れば砂防工事の
小屋掛けて居り

ごろごろと手臼を碾ける豆腐屋の前にとまり
て汗拭きにけり

湯川谷下り來て出でし本流の常願寺川は更に
岩うづだかし

立山の奥つ谷より濁り來る水のいきほひを岩
々耐ふ

皇太子殿下

新聞紙上にて御近状を拜聞す

高光る日の皇子ながら那須の山に童さびして
蟬捕り給ふ

澁谷の家

東京の澁谷の家にまれに來て泊りし朝の茅蜩
のこゑ

茅蜩鳴くこの市中まちなかの庭木立武藏野時代の櫛殘
りて

庭の隅を畠になして吾が甥のつくる蕃茄子あかなす太
らざるらし

若き甥は會社づとめにいとまなみ庭も畠もか
まはぬならむ

牛込の家を賣る時移し植ゑし無花果の樹の果
は太りつつ

天
津
北支行一

支那駐屯軍參謀長に吾が訊けば明日にも戦争
起るべらなり

支那駐屯軍司令部の庭に藍花のむらがり咲き
て秋陽がしづか

黄河越えて共産軍の來る日あらむ鴨子を食ひ
て腹ふくれたり

かかほりなく街空澄めり商震の兵に代りて誰
が入り來らむ

北

平 北支行二

駱 駝

かくのごと眞深き空は見ざりきと友と歩きな
がら幾たびも言ふ

城壁の厚きに穿つ門暗し駱駝つらなりてはひ
りきたれり

混みあへる往來のなかをよほどかに駱駝の頭
莖の揺れて行きつつ

往くと來と駱駝にあへり東京の街にて牛を見るよりも多し

東京ならば銀座の街といふ所を駱駝つらなりて通ると思へや

死ぬ時は北京に行きて死に度しと齋藤茂吉言ひしおもほゆ

紫禁城

東夷西戎南蠻北狄おび威すために建てし樓閣うてなを観ておどろかむ

紫禁城を仰ぎて行けば陽は澄めり一線いっせんの上に次の門次の門



何々門何門と言へど仰ぎ行くにただ頸すぢが
痛むばかりなり

紫禁城の北なる白塔山に登りて

森林なせる樹群こむらに市街まはかくれたり百五十萬
人住めりと思へや

森林なせる樹群を見ればひとりにおちつき
深し槐樹ゑんじゆと楊柳やなぎ

聞説きくならく春秋戦國の昔よりこの都會まは在りき森林
の隠さふ

元の世祖忽必烈は日本を攻めし時ここに居り
にけむ森林の樹くろし

元も明も清も亡びてしばらく此處に袁世凱居
りき森林の茂らふ

近頃居る宋哲元は袁ほどの英雄にあらじ森林
の茂らふ

森林なせる樹群を越えてはろかにし赭き野原
のひろごれる如し

萬壽山離宮 北支行三

殿守は橋を渡る時言ひけらくこの岸に雁のく
だる日近し

吾が佇む水際より山へたたなほり層なり照り
あふ琉璃瓦の屋根

遠く離れて龍王廟の瓦屋根深き琉璃色なす湖うみの上へに照り

女にて権力持つはよろしけれ呂太后と言ひ西太后と言ひ

秦始皇の阿房宮といふは更にこれの何倍ぐらゐか考へて居り

製艦費をこの造營に向けしゆゑ黄海のいくさ敗れしと言ふか

明 十三陵 北支行四

いささかは雑草あらくさ叢むらのありければ鶉うすが啼きつこの石原に

石原のでくぼくみちを驢に乗りて徒歩行くよ
りも足腰痛し

雲南の大理石ここに運び来て剝り刻みし象や
馬や獅子や

大理石の橋崩え落ちて土被れり渡り終るまで
吾が知らざりき

みたまやの碑亭の前に驢を下りて幽かに聴け
ば黍の風あり

この皇帝の御名は親しも子供の時永樂錢をわ
れら使ひき

萬里長城 北支行五

秋眞晝八達嶺を下りて來る駱駝の列にあひに
けるかも

長城を觀に來る人の今日多し葡萄賣る兒は乞
食ならむ

葡萄買へとまつはる童垢臭し長城の壁に吾が
のぼるなり

踏みのぼる城の鋪道の草見ればすでにこの山
に霜の下りたる

空晴れて烽火臺に人の居るが如し其處までわ
れも行かむと思ふ

築きわたす長城の壁眼傳へば谷に下り峯を上
り谷に下り峯を上る

天あめのはてにまぎれむとして遠とほ々に尾根に架け
たる城壁はつづく

築きづきわたす長城の壁高々し幾たびか越えし蠻
族をおもふ

滅めびざるものの寂しさ秋の陽ひは萬里長城の壁
にい照らふ

烽のろし火臺だいの地下道に吾が下おりむとし蠍さそりの跂はふを
聞きたる如し

福島酒田間 兩羽行一

福島板谷峠間汽車中

出羽の秋はさびしきものを露霜のふりにし妻
も共に來にける

朝日てる山のいただきの舊火口こちらに向き
て大きく開く(吾妻山)

いちじろくのぼりとなりし國境に鐵道防雪林
の杉高からず

最上川の岸なる清川驛に下車して二首

むかつべの岸の楢山紅葉してこちらの道は芒
薄が多し

築を越す水あをあをしこの川に鮭群れてのぼ
る季節想ひぬ

今日を來れば庄内平野の刈入すみ港の倉庫の
にぎはふ酒田

最上川の大橋の上ゆ見放くれば冬の來向ふ海
は浪立つ

鳥海山 兩羽行二

酒田郊外最上川の堤上にて

登り來て足投げ出す川土手の稲架木がもとに
日のあたたかさ

稲刈り干すこの人々は野に出でて久しかるら
し朝の日高し

立て竝めし野原の稻架木かぎり無し鳥海山の
山根に及ぶ

鳥海山の禰呂に光れる斑雪あり古き雪にはあ
らざる如し

鳥海山の禰呂の斑雪は雷雨過ぎしこの曉に
りた多ならむ

朝晴れし刈田の原のいやはての低き砂丘に眼
はとどく

鳥海山の傾斜緩やかに曳きたればそのはてに
在る海を考ふ

酒田鶴岡間の舊街道を行く、新道路殆ど竣工

舊街道の川橋の上は今曉ふりししぐれの雨の
乾きて居らぬ

刈田とほるにひはりの道一直線に酒田鶴岡を
近づけむとす

酒田秋田間 兩羽行三

汽車中にて

刈田原の眞北の空に晴れてゐる鳥海山に近づ
く速し

有耶無耶の關陘の邊は芒薄生ふる磯石原と見
てを過ぎにき

芒^{オサキ}薄^キ生^ナふるこの荒^{アワ}磯^{イソ}路^ヂも昔^{ムカ}より通^トる人^{ヒト}ありて
關^{セキ}は据^ツゑける

松^{マツ}の木^キ間^マの柿^{カキ}が熟^ウれたる象^{ゾウ}潟^{ワタ}に停^トまりし汽^キ車^{シャ}
は出^デで行^イかむとす

石^{イシ}油^{アブ}汲^ヒむ拔^ヒ井^ヰの櫓^ユ遠^{トホ}丘^カの赭^セきが上^ウに立^タてらく
もさびし

鳥^{トリ}海^{ウミ}山^{ヤマ}に斑^{ハダ}らに降^フると見^ミし雪^{ユキ}はここのほか多^タ
しその北^{キタ}側^{ガハ}に

海^{ウミ}岸^{カシ}線^{セン}の驛^{エキ}はすくなし我^ワが汽^キ車^{シャ}は飛^ト砂^サ防^ブ止^シ林^{リン}
に沿^ユひて駛^シれり

八 郎 瀉 兩羽行四

八郎瀉を觀むとて男鹿半島の寒風山に登る

五八

湖のべの刈田の原の畦みちにのろき蝗蟲を吾
が踏まむとす

文化何年の地震供養塚凡に見て登る山原の草
枯れて居り

男鹿半島の寒風山に吾が佇てば鴨のわたらふ
湖空低し

八郎瀉に鴨夥しくくだれりと今朝の新聞にて
讀みしを思ふ

雷魚を漁ると沖べに群れてゐる舟はちひさし
日本海に

五九

八郎瀉の岸べの驛は刈りし田の向うに見えて
汽車停まり居る

下山、急雨に遇ふ

日本海よりしぐれの雨の來る速し八郎瀉の沖
くろくなりぬ

岸のべに舟を竝べし鯊釣りも皆上り來て霑れ
て歩めり

湖に沿ふ刈田の道を來にしかば日本海への切
戸が青し

田澤湖 兩羽行五

湖畔夕步

ここに^たして誰が食ひさしの通^{あけび}草の實焚火のあ
とに棄ててあるかも

駒ヶ岳に夕凝る雲のくろければしぐれ來べし
とおそれて歩む

楢の葉の枯葉吹き飛ぶ湖^{うみ}岸^{ぎし}をしぐれ來べしと
おそれて歩む

しぐれの雨ふらばふるべし古妻ののろき歩み
はせむすべもなし

翌朝舟遊

原始林のくれなるもみぢ黄のもみぢ遠岸にし
てまなこに沁むも

みづらみをい榜ぎゆきつつもみぢ葉の漂ふ見
たりこの沖中に

沖べ榜ぐ舟の上へに居りこの湖うみの深さを聞きし
妻寒がるも

黄葉もみぢせし原始林の山の真下に来て水はことさ
ら深さがごとし

仆れゐる杉の太幹ふたみきの裂け口のなまなましかり
黄葉もみぢ樹ぎのなかに

湖尻に榜ぎ近づけば村の犬のべらべらと吠え
て水に響かふ

瀬見温泉 兩羽行六

六六

温泉宿に日のくれ著きて羽黒山の護符を貼り
し戸口くぐりぬ

下つ瀬の橋のあたりと見るがうちにこの川
瀬にしぐれ來にけり

出羽の奥の温泉の山に時雨ふり家こひしが
妻と向きあふ

冬ちかき峽間の村の湯旅籠は夕餉に焼きし鮎
の瘠せたる

小國川の瀬見の湯泉場夜くだちてちちごちの
岸に犬吠えかはす

六七

薩摩歌 南九州行一

西鹿兒島驛著

眼の前に櫻島山^{かき}昇るへるかはたれ時を支線に
乗り替ふ

翌朝自動車にて山川港の岸を過ぐ

薩摩藩の異國船番所^{はじ}もなき冬のみなとの岸
を駛りぬ

揖宿半島長崎鼻

磯山の松の蔭にくろく自生せる蘇鐵を覗き岬
に出でし

七〇

吾が佇つや岬の岩礁に冬日照り黒潮の沖ぞゆ
たに盪める

その他の島は見がたし正南にけぶりを噴ける
硫黄島のみ

この岬に遙に對ひて煙噴く硫黄島まで十二三
里か

くろ潮の風ぎに霞みし島山は噴ける煙のみさ
やかに騰る

黒鯛を釣ると下りゆく人ひとり岬の岩礁の陰
にかくれぬ

七一

大隅の佐多の岬は海越しに突き出でて青し鷹
棲むといふ

七二

海門岳の東北麓を行く

甘藷の葉に初冬の陽の照り温み南薩摩の甘藷
畑ひろし

海門岳のふもとにひろき甘藷畑は牛に犁かせ
て甘藷掘りおこす

鹿兒島市より櫻島を望見す

風ぎの海盪みて狭しむかつ邊は大根作る西櫻
島村

七三

七四
くろぐろし熔岩原に隣りしてさくら島人畑作
る見ゆ

火を噴きし山のふもとに島人の作る大根引く
頃ならむ

鹿兒島驛發、汽車中

新聞記者と加治木驛にて別れしが高千穂の岳
車窓まに來向ふ

大 浪 池 南九州行二

韓國岳に登らむと霧島保護林を過ぐ



七六
縦^{もみ}柵^{ごが}の林の冬^{ふゆ}陽^びたまさかに赤芽柏の黄^{もみぢ}葉を照
らす

大浪池のほとりに来て

めのまへの韓^{かん}國^{こく}岳^{がく}はいつ霽^{はら}れむ雨^{あめ}霧^{ぎり}に沾^ぬれて
焚^も火^くを燃^もやす

したたかに燃^もやす焚^も火^くに面^{おも}熱^ほてりすべもあら
ぬかも脊^せ筋^{ぢん}の寒^ささ

火^か口^{くち}壁^{かべ}くろく見^みえしが雨^{あめ}霧^{ぎり}の吹^ふきおろすなべ
に忽^{たち}ちに無^なし

きりしまの韓^{かん}國^{こく}岳^{がく}のお池^{いけ}には鴨^{かひ}が下^{くだ}りゐて霧^{きり}
のなかに啼^なく

水際^{みぎは}まで笹^さふみわけて下^{くだ}りむとす雨霧^{あまぎり}の底^{そこ}に
鴨^鴨の啼^なくこゑ

鶉 戸 南九州行三

鶉戸村吹毛井に泊る、月明

或家はいまだ起きぬて燈^ひの影^{かげ}のをぐらき土間
に綱^{なわ}つくろへり

さし出^いでし岬^{さき}の山^{やま}の外^{そと}の邊^へにて音^ねはして居^ゐり
日向灘^{ひなたな}の浪^{なみ}

今夜^{こゝろ}寝^いねむ村^{むら}の宿屋^{しゆくや}にもどり來^きて月^{つき}のさし
る戸口^{こゝろ}あけたり

翌早且鵜戸神宮に詣づ

神垣の近づくなべに靴脱ぎて吾が足音もさこ
えずなりぬ

鴨

南九州行四

日向青島にて

この島の蒲葵樹びらうじゆの葉おとろへて鴨ぞ下りゐる
磯岩原に

下りて來し鴨の一群ひとむれは蒼潮あそしほの大きうねりにの
りて漂ふ

下りて來し鴨の一群はつややかに青き頸なら
べ岩の上へにゐる

うねり來て飛沫しぶきをあぐる浪の共鴨むたぞ飛びたつ
岩のうへより

寄る浪の飛沫しぶきの搏つかてば鴨鳥の或は啼なきて岩す
りて飛ぶ

日向灘の大うねり浪岩を搏つかちとどろと鳴れば
鴨のこゑ消ゆ

昭和十二年

東北と北海道

蔦温泉に泊る

山毛櫟林通りて著きし湯旅籠の前の草地に水
芭蕉の花

八八
午著^{ひる}きし山の温泉^{いづゆ}の部屋^{むか}明し障子^{あざし}にゐたる蜂
を追ひ出す

青森に出でむとて八甲田山の中腹を越ゆ

峠^{たて}みち津輕境に近づきぬ笹の根にある雪は増^よ
えたり

叢^{むら}中の小沼の水に雪しろく映れる見れば高田
大岳

峠路は矮^{ひく}き榎^{えん}松^{しょう}殖^ふえて來てつひに榎松ばかり
になりぬ

八甲田の大岳小岳赤倉岳近づき過ぎてわから
なくなりぬ

草ふかき雲谷の平は飛行場の豫定地にして牛馬遊ぶ

阿寒湖のほとり

みづうみより流れ出づる川の陰岸に桂の若葉
黄につやめきぬ

みづうみの隈邊に隠るこの島に巢懸けて有らし
山鳴の雛飛ぶ

阿寒湖より屏斜路湖への横断道路を通過す

斑雪置く雄阿寒岳は深々と落ち込める谷の向
うに峙てり

猿麻^{さるま}栳^{がせ}しじにさがれり眼に寒く原始林の樹々の衰へむとす

谷ふかく生ふる大葉^{おほは}篠^{ひざさ}壓し靡け木と木みだれて仆れてゐたり

谷の木に喰ひつきてゐる熊^{くま}啄^く木^らのかうべが紅し暗き光に

屈斜路湖畔

鮭小屋のくされて立てる岸低し水押し揚げて
釧路川流る

椴^{びん}松^{まつ}の林つらぬける道ながし蛇^{へび}轆^りき殺し自動^{くどう}
車^{くるま}駛^{はし}りぬ

時々あふアイヌの小屋は露のなか部落作るほ
ども居らざるならむ

九四

樹々と樹々の枝葉みつちり絡^{から}みあふかかる原
始林は今朝も通りし

山の根の硫黄製錬所より煙來る蕾のかたき蝦
夷つつじ原

上富良野驛下車

十勝より越えて吾が來し空知川の水上の田に
稻は短し

十勝岳吹上温泉に宿る

九五

温泉の出でし時より營める宿屋はいまだ貧し
げに見ゆ

上役に山林監視あひに來て山椒魚のことを言
ふ談話がきこゆ

洞爺湖

鱒網の浮標に立てたる旗赤し蝦夷のみづらみ
夏闌けにつつ

大沼

榎梲の花うす紅き朝にして牧場主の家に牛乳
を飲む

炎夏動員

七月廿日宛平縣城砲擊の號外を讀む

汗かきて土用の入りの今日清し皇御軍火蓋切
つたり

翌朝新聞を見て

砲擊の熄みしすなはち野原には炒りつく蟬の
聲起れりと

友人の長子の出征を送りて二首

一〇〇
國のため戦争に出づるますらをの親は人混み
にもまれて行きぬ

國のため戦ふ子ろを見送りし友はしづかに歩
きて歸る

芝生の上に二鉢置ける濱木綿の花衰へてにほ
はずなりぬ

茅蜩の涼しきこゑは聞きがたし鳴くは熊蟬あ
ぶら蟬のみ

壯子時も老に近きも出でて征く朝な夕なの昂
ぶりを見つ

いづこまで擴がりて行く戦争かと妻の間ふか
もわれも知らぬを

じつと考へ額ひたひに汗が流れきぬ日露戦争よりも
大きくならむ

少年團の喇叭の聲は整はず汗をたらし吹き
つつ行けり

羸弱ひよわくて籠りのみ居る吾が子ろのいのち憐む
かかる時にも

蒸しむしと暑き晝なり廁にて大きなる蜘蛛を
たたき殺しぬ

炎夏朝夕

じだらくに朝から汗をかき居りて晝飯ひるめし時ときにな
れば飯食めしふ

食欲の減りしゆゑにはあらざらむ土用蜆の汲
物うまからず

晝日中みだりに吠えて吠えたつる我家の犬に
苛々するも

衰へて落つる桐の葉八つ手の葉日中の風に吹
き飛ばされぬ

現身はすべなきものにありにけり働かぬわれ
の膩汗はや

夕立の吹き迫るなべ雀らは櫛にもぐり八つ手
にひそみ忽ち静か

この部屋の庇に近き黒松に流るる樹脂のほ
ひかもする

じいじいとにぶき聲する夜の蟬十時頃にてい
まだ鳴き居り

暗き樹の葉ごもりにして夜の蟬鳴きて逃げた
るこゑは短し

井伊谷詣

濱松より輕便鐵道に乗りて

汽笛鳴らし駛る桑畑茶の木畑三方ヶ原にすで
に出でしか

濱松より乗り合ひし飛行將校は芒薄のそよぐ
驛に降りたる

龍潭寺

岩組いはぐみを僧は譽ほむれど荒れはてて石落つはぶきの花とこ
ろえらばず

桶狭間に戦死せるもあり開山堂に代々の領主
の位牌が黒し

井伊谷宮

龍潭寺と井伊谷の宮おのづから境界さかひは荒れて
茶畠つづく

鳥居前狭田さだの晩稻おくてを刈りいそぎ宮境内はもみ
ぢの落葉

延元陵は北を望みたまふこのみ墓も京都に向
きて椎の蔭なる

信濃の宮とも遠江の宮とも申し上げ御生涯東
國に戦ひましき

銃後私帖 一

八百萬神ヤ ぼ や ろ っ ちの護れる皇軍みいくさと疑はなくになほし祈
るも

地圖の上に眼凝まなこらして吾が友は子の戦へる所
を探す

甥出征二首

吳淞にすでに上陸りてしかばねのにほひ嗅ぎ
つつ飯食ひ居らむ

上海に征きし吾が甥若ければ手紙もよこさず
生きては居らむ

長城の雁門關越すみいくさは谷の水を割りて
水汲む

長城を昨日か越えしみいくさはすでに蒙古の
街に屯す

戦へる兵等も秋のこのごろは故郷の田の稲お
もふべし

祖國は今稻を刈る時たたかひはたけなは酣にして冬な
らむとす

南京陥落の時一首

夜も日もなく攻めに攻めたる皇軍みいくさの勝ちし報しら
道せはいただきて讀む

もの書くところりしかば隣より兵の發たちし
を知らで悔いにき

さしなみの隣の長屋二人まで應召兵出して歳
暮れむとす

昭和十三年

1
2

銃後私帖 二

包頭一首

そくばくの兵が屯たむろして年越えし蒙古の街は黄
河に臨む

停留所近くまで来て心づき弔旗を出せと言ひ
に戻りぬ

徐州會戰前後

戦ひてみいくさ進むこの道を昔ゆきしは遣唐
使なりき

あわただしく何處いづこに送る兵ならむ徐州攻撃過
ぎて出で征く

長期戦覺悟

日露戦争當時は若き學生にてもものを憂ふるこ
と知らざりき

黒髪のしろくなるまで生きしとき最も大なる
戦争に會ふ

此の戦争今年はおろか來む年も又來む年も續
くおもひす

此の戦争我等の生ける世はおろか次の時代に
續くおもひす

國家興る戦争にしあるを國難と警めあふは深
き所以あり

日清日露戦ふごとに勝ちしかばたはやすく思
ふ人もあるらし

短かるわれの一生も幾たびか戦争をみて今日
に到りき

戦はねばならぬ時にしためらひて戦はざりし
國は亡びき

銃後私帖 三

七月五日大水害の時三首

我が家にも水が浸くかと潛山の激戦の日に怖
れぬたりき

戦ふは國の外なり山津浪は眼の前にして家を
流しき

戦場の夜寒厳しといふ記事は水害を免れしわ
れを衝ちにき

山津浪の土砂軒下にうづだかきこの街よりも
今朝は兵發つ

いつものごと大阪驛に降りしかば今朝の多さ
よ兵送るこゑ

この驛を今發つ兵の顔みれば皆吾兒よりも若
きが如し

老いづきしわれ等が伴は戦はね愛しき者を多
く送りき

對ひゐてひそかに感ず戦争より還りし兵の目
見はさびしき

西湖雨後

樹海出でてわが眼に見しは湖ぐまを押し埋め
たる熔岩なりき

西の湖の根場の宿は山くろくおしかぶされり
その家むらに

西湖の水位いちじるしく上れり六十年
來の豪雨なりしといふ

湖のみづ道にあがれり眼の前に根場の宿は見
えて行きえぬ

湖ぐまに水漬きてすでに朽ちむとすこの部落
民の食料の稻

貞觀六年噴火の時もこの湖岸に田畑はありて
皆埋もれき

夕近く山陰の湖うみにやる船は水漬みづきし桑にさや
りつつ出づ

西の湖に今日を來しかばむかつべの熔岩の群
水漬みづきて低し

、おほ大雨あめに赭せく崩れし片岨かたぎしの眞下の淵はすでに澄
みたる

武漢進撃

戦争せんそうはこれにて熄やむと思はねど武漢三鎮伐つ
日さたりぬ

武漢まで堡壘とりでばかりの地圖を見てわれは弱き
か息衝いききあます

九月五日

これまでに無かりし現象と思ふなり今朝の颯
風は雷をともしなふ

ここにゐて曇天の雷の鳴るなべに廬山に震ふ
砲聲きこゆ

行動を起してすでに幾月か鄱陽湖の岸に今日
激戦す

翌朝

朝刊面読み反し吾が息弾む前日と同じ線に戦
ふ

遮二無二旅順攻めしに變らざるたたかひぶりをわれ泣かむとす

北白川の家

街かどの石の地藏に帽脱ぎて北白川へ坂を登りぬ

吾兒のため造りし家に稀に来て椅子ばかりなるはおちつきがたし

いつよりか處女王朝文學を研究し父よりもすでに精しき如し

吾が兒には吾が知らざりし静かなる生活をさせて悔いざらむとす

九

那須岳と朝日嶽

新那須温泉滞在中

朝明けて煙を立つる炭竈は御用邸より遠から
なく

丘の上の那須御用邸しんとして散歩の道はし
ぐれ來むとす

那須野寓目

野はしぐれ防風林の杉むらのくろぐろしもよ
部落のうしろ

しぐれの雨いまだ霽れねば人出でて那須野の
隈に陸稻刈る見ゆ

暮るるまで野に働くかこの家も馬は居らずし
て馬部屋ひろし

疲れたる馬は歸り來て夜を寝ねむ竈突に對へ
るこの馬部屋に

那須登山

硫黄運ぶ土櫓の道のひとすぢは赭くとほれり
草生ひしめず

今朝ふりし時雨はここを外れたるか土櫓の道
の土乾き居り

八
九
溪橋に寫眞機提げてたもとほる西洋婦人登山
をするか

苦土川白土川の溪左右に流れ登山路は今雑木の
黄葉

白河からの道は細けれ登山路を横さに斷りて
谷底へ消ゆ

午時、硫黄製鍊所に著きて辨當をつかふ

路のべの鑛山會社事務所にて煙草も菓子も賣
れり煙草を買ひぬ

製鍊小屋ひそけく立てれ戸口には硫黄鑄塊陽
に光り竝ぶ

硫黄製錬所構内の畑のやせ燕菁かぶらねもごろに土
をかけて作れる

山坂を硫黄を負ひて踏みくだる牛はその足に
力を張れり

鑛道を架けてはあれど那須やまの硫黄鑛山は
牛も亦使ふ

鑛道に故障多きことは住友の伊豫の鑛山やまにて
われも知りなき

嶺の上に人間と牛と働きて採りし硫黄は火薬
廠へ行く

澤奥なる新鑛山の鑛夫らは地竹の藪きりの切明あけ
を通ふ

登山路は山の北側に廻り来て熔岩碎屑を踏む
こと多し

朝日嶽眼前に峙つ

那須岳にただにむかへる朝日嶽けぶりは噴か
ね岩秀おごそか

硫黄沸く那須の大嶽鳴りとよみ向つ岩山の岩
に反響す

峯の茶屋、那須岳と朝日嶽との鞍部に在り

たまさかに硫黄採取夫來てものを喰ふ峯の茶
店は石ころの中

硫黄採取夫會津へ越すかとわれに問ふ柿喰ひ
ながら否と答ふる

噴氣孔群

風の方^む向^き定まらぬかも噴煙^{けぶり}のした屈^かまり歩み
近づかむとす

ふためきて石に屈めどもすべもなし噴煙^{けぶり}のな
かを疾風^{はやち}通れり

硫黄沸く爆裂火口のほとりにて牛の糞^{くそ}あまた
見しはさびしき

眼の前に噴氣相の活動さかななるかな衣囊^{かぶし}か
ら出して柿ひとつ喰ふ

岩間より漏るる硫煙けぶりのひとすぢは熾霧かきろひに
つつ紫に澄む

岩間より漏るる硫煙けぶりの團塊かたまりの立ちも騰たぎらず岩
に粘ねばらふ

那須岳に硫黄採る男をのする焚火岩陰にして火
の粉を飛ばす

絶巔茶臼嶽に登る

毛野比多知會津白河四方八面もの山を青雲しやうの下した
に見残さず

稻田はもすでに残らず刈られしか四方の國原
に照らふ色無し

吾が佇てる大き山より幾すぢも放射谷延びて
光る瀬があり

那須岳はおのれ火を噴き遙かにしみちのくの
山の火を噴くに對ふ（遠望吾妻山）

峯の茶屋より朝日嶽を攀づ

赭ぐるき岩崩え山の朝日嶽屈まり攀づと顔は
岩に著く

たかやまの岩群のなかを攀ぢなづみ掴みて
る岩は凍みたり

頂上にて

岩の上に賽銭あまた赤錆びてあらたかなる山
を心寒くおぼゆ

朝日嶽の毘沙門火口大きけれ噴き絶えてくる
く偃松の掩ふ

裏谷は偃松の叢ただに黒し東に衝きて火口瀬
落つ

谷を掩ふ偃松叢にあなざやけ矮樹の紅葉くれ
なぬぞ澄む

偃松叢くろくはてなく斷續して三本槍嶽の麓
に及ぶ

會津にも雪のある山をいまだ見ず北に又北に
青嶺涯なし

下山、大丸温泉に向ふ

くだりゆく山の岩むら西日さし稜々しもよ岩
に陰翳あり

鹽原山晚秋

甲状腺手術後の妻と同行す、鹽原行
乗合自動車中

那須野の小學校に齋場ゆにはつくり戦死者祭る今日
と知らむや

會葬者野中に降りて空すきすきの乗合自動車山
へ行き向ふ

旅行きてやまひ養ふ老妻も時世の相に目を瞠
るらし

鹽之湯といふに行きて泊る

放鬼川より鹿股川の谿にはひり急に濃くなる
紅葉を仰ぐ

山のやどの壘の上におちつきぬあはれ老いづ
きし妻の静けさ

老妻は疲れて有らし温泉宿のちさき枕にはや
も熟睡す

朝川の瀬鳴りの音にまじりつつ檜鳥さけぶ荒
きそのこゑ

八九
古旅籠と新築旅館入りまじりいづれの軒にも
紅葉散りぼふ

紅葉ちる瀧道にして大き葉の厚朴ほぼの落葉を稀
に踏みゆく

馬車を憮ひて温泉巡りす

紅葉の谿湖のほればやがて温泉場ゆざこ盡き川原芒に道
をうしなふ

越ゆる人今はなしといふ會津みちの尾頭峠おしらたうげみ
なかみに曇る

山馬車は積にて廻まはり枯芒のそよぐ道路だうろをひき
かへし來る

八九
歸るさはすでに燈ひともり川べりの宿屋店屋の
疊あかが明し

畑下戸温泉此處に避暑せし學生時代を
追憶して

白露戦争たけなはなりしが山川の清き邊べに居て遊び
暮らしき

片淵の岸をくだりて畑下戸はたおろここのらの岩は一つ
一つ知る

畫僧普門溺れしといふこの淵を眼前まなまきにして一いち
夏送げりき

しろき岩現あらはれて居り普門淵は淺くなりしかと
さびしく對むかふ

名護屋城趾 北九州行一

晩稻刈る谷田のしたにあをあをと入り込める
水を海と知らざりき

城趾を三の丸よりはひり行けばくづれし石に
今朝の霜あり

本丸の古石垣の下邊にて二の丸は桑を植ゑ大
根作る

玄界洋の冬を働く捕鯨船むかつ島べに繋かり
てくるし

韓を伐つと八十國ここにつどひたり捕鯨船來
て屯す今は

玄界洋ゆ吹雪を送る風の共この城趾の松は響かふ

この疾き風のなかにて島山の小屋は鯨を見張り居るべし

韓山へ最も近き岬にて雪のしまきにあひにけるかも

雪しまき過ぎて晴れたる海づらはるばるし
もよ對馬さへ見ゆ

呼子港 北九州行二

玄界洋見ゆる谷山の上に出で俄に寒き北風に
遇ふ

八九
ここに來て冬の間は居る捕鯨船を港の人らな
つかしむべし

捕鯨船の乗組員らと行きちがふ港の街に冬陽
くもれる

捕鯨船來る港の外邊には玄海の冬の浪ぞ響
かふ

領巾振山 北九州行三

吾が攀ぢし領巾振山のいただきは雜草枯れて
稻荷の祠ほこら

赤鳥居池に映れり佐用姫は祀られずして稻荷
のほこら

疾風はやちふく山上にして男ひとり稻荷の宮の鳥居
塗り居る

冬雲の低くなづさふ海にして沖燈臺は岩礁いはの
上に白し

燈臺の岩礁いはにかぶさる飛沫しぶきたかし玄海はすで
に冬浪立てり

真晝まひるふく疾風はやちのなかに佇たち竦すくみ瞰み下おろす海は渚
濁れり

元寇防壘陟 北九州行四

蒙古まうこ來くと八十國やそくにつどひ防ぎにしこの石築地いしついでち高
からなくに

八九
われわれの遠つ祖先達のち捨てこの石築地
守りとほしき

蒙古勢必ず來むと夜もなく日もなく築きし石
築地是れ

蒙古の船下げ矢に射るときほひつつ馬乗り懸
けし石築地是れ

海掩ふ蒙古の船ゆ石火矢を射かけ注ぎし石築
地是れ

いにしへを憶はざらめや防壘の石にかぶりし
砂うち拂ふ

蒙古勢を防ぎとめにし石築地くづれて續く冬
の濱邊に

このあたりの寺に在りといふ蒙古塚吊はずし
て冬陽傾く

宮崎宮 北九州行五

蒙古來ふせぎし時の兵火にあな畏くも焼かれ
たまへり

文祿三年小早川隆景造營の高き樓門海に眞向
ふ

この宮に敵國降伏の扁額をあげしいにしへび
との意圖旺なる

遠岸に格納庫しろき飛行場灣の景色を大きく
するも

博多灣雁之巢飛行場に降りむとし機の影駛る
朝浪の上を

去れり
宮崎の松原の空とよもして西へ西へと飛行機

觀世音寺 北九州行六

都府樓は礎石ばかりこの寺に佛像あまた遺り
てさびし

堂の隅に馬頭觀世音怒りて立ち地藏菩薩の慈
眼と對ふ

忿怒相の馬頭觀世音ちかづきて仰げば馬の鼻
の孔見ゆ

大寺の成^{いん}亥^おの小田の畦ゆけば玄昉僧正の墓は
冬^も青^ちの木の蔭

青丹よし寧樂の京^{みやこ}にときめきて刈田のなかの
低き墓石

殺さるる宿世を持ちてこの僧のまなこは寒く
佛^{ぶつ}に向きけむ

この僧は圖^づ太^ごきものを肚^{はら}裏^らに持ちて筑紫の涯^{はて}
の土となりぬる

青丹よし寧樂の京の何^{なん}人^{びと}をも牽きつけし眼は
ここにふたぎぬ

都府樓と觀世音寺と蕞^{いらか}竝^なめここに峙^たちしは杳^{はろ}
かなるかな

都會の冬

冬來る

地下道出で今橋へ北濱へわかれ行く會社員等
すでに冬の服裝す(淀屋橋)

縦堀はしみ立つ町屋のあひだより枯れし柳を
ところどころに出だす

縦堀に見えてかさなる數多の橋夕まけて人の
渡る脚速し

兩隣の近代建築に瞰下され冬木まばらなる豊
國神社

島公園に据ゑし廢艦の帆柱は國旗を揚げて冬
空に尖さかる

川堀の荷揚人夫ら日向ひなたにゐて顎あごを動かし辨當
つかふ

川から吹く西風に外套の襟立てて朝日新聞社
へ橋を渡りぬ

觀光艇にて

家々が架け出しに置く植木鉢に花のものは見
えぬ冬の川なり

劍先を過ぎて見かへる川空は向きむきに架け
し橋はし梁し交錯す(船津橋附近)